

喜志南遺跡

-宅地造成に伴う埋没古墳の
調査概要報告 (KSS2021-2)-

2022.10.31 富田林市教育委員会

1.はじめに [図1・写真1]

今回報告する喜志町一丁目の調査地は、市内を縦断する石川に近い低位段丘上の段丘崖付近に位置する。周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、宅地造成の計画が持ち上がったことを受け、2021年10月に試掘調査を行ったところ、遺構・遺物を確認した。とりわけ問題となったのが、調査地内に形象埴輪（写真8・遺物番号150）を含む埴輪片が散布していたことである。トレーンチ設定場所の関係から、試掘調査で出土した埴輪は少量であったが、同年度に先行して実施した喜志南遺跡の北端における調査（2021-1地点）で埴輪が大量に出土していることをふまえ、同遺跡を飛び地状に範囲拡大することにした。

本調査の範囲は、新設道路と宅地の切土部分を対象とし、それ以外は工事施工時に立会調査を行うことにした。本調査は同年11月から翌年の2022年1月にかけて実施し（実働42日間）、立会調査は現在も断続的に実施中である。

今回の調査では埋没古墳（小字名から仮称「浮ヶ澤古墳」とする）や、埋没古墳以前とみられる堅穴建物などの遺構を確認した。遺物は縄文土器、弥生土器、土器部、須恵器、埴輪、サヌカイトなどがあり、それらの量は現時点で整理コンテナ50箱以上にも及ぶ。大半は埴輪であり、市内初

となる多量の豊富な形象埴輪が含まれている。整理作業の完了までは多くの時間を要することが予想されるが、その重要性を鑑み、浮ヶ澤古墳に的を絞って概要を報告したい。なお、記載する遺物番号は、今回の報告のための仮番号であり、見解等については今後変更する可能性がある。

調査は富田林市教育委員会文化財課 角南辰馬が担当し、宇都宮基予美、貴志正則、土山賀代、山地美生の諸氏の参加を得た。調査にあたっては、事業主であるシンヨウ建設株式会社に多大なるご理解、ご協力をいただいた。また、現地調査に際して、下記の方々からご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表します（順不同・敬称略）。

池田貴則、上田 瞳、海邊博史、櫻木規秀、河内一浩、木谷智史、小浜 成、白石耕治、白井典之、橋 泉、東影 悠、肥田朔子、安村俊史、和田一之輔

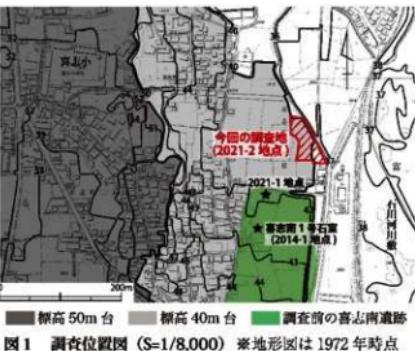


図1 調査位置図 (S=1/8,000) ※地形図は1972年時点



写真1 調査地と周辺の状況（北から）

2. 墳丘と周溝の状況 [図2、写真2]

前方部とみられる墳丘残存部と、大半が周溝になるとみられる落ち込みを検出し、埋没古墳（浮ヶ澤古墳）の存在が明らかとなった。検出範囲での前方部の規模は、長さ約5m、前面の幅約8mで、地山削り出しによる基底部の上に、墳丘盛土と思われる褐色粘質土がわずかに残存していた。後円部側は、落ち込み底面が調査区で下降を続けており、後円部は調査区の外にあるとみられる。

落ち込みの底面のレベルは、箇所によって差が大きいが、周溝範囲外とした部分はほかよりも明らかに浅いため、後に周溝の肩部が崩れたと考えられる。地山に含まれる礫群が掘削底よりも下位にある場合は、一定の深さまで均一に掘削しているが、前方部側面のように、礫群が掘削中に表に出する場合は、そこで掘削を止めているように見える。本来の平面形は、全長30m以下の倒卵形と考えられ、前方部前面（北西隅付近）および前方部東側面には、周溝を掘り残す形で渡土堤が取り付いていたとみられる。

以上から古墳の形状を復元すると、主軸をほぼ南北に向けた墳長20m前後の前方後円墳であり、前方部東側面の渡土堤が墳丘に取り付く部分よりも南側にくびれ部があり、帆立貝形のように短い前方部にはならないと推定できる。

前方部の一部および落ち込み上には、墳丘削平時の流出土と考えられる厚さ10cm前後のぶい黄褐色もしくは灰

黄褐色粘質土が堆積し、大量の埴輪片が含まれていた。落ち込み内では、底面に近づくほどその量は減少する。形象埴輪は、前方部東側面の渡土堤南側を除いて、墳丘流出土と落ち込み埋土の境目付近に集中し、小片化しているものの、個体ごとである程度、出土位置にまとまりがみられた。

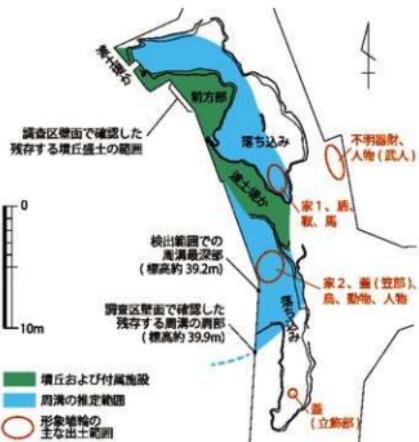


図2 浮ヶ澤古墳の平面概略図 (S=1/400)



写真2 調査風景

左上：前方部と落ち込みの状況（北東から） 左下：前方部東側面の渡土堤南側における形象埴輪の出土状況（北東から）
右：真上からみた調査区の完掘状況（上が北）。撮影後に調査区を拡張しているため、図2とはその形状が異なる

3. 周溝等から出土した遺物 [写真3~9]

円筒埴輪「V群円筒埴輪」(川西 1978)で古められており、外面にヨコハケを施したものは認められない。橙色を呈する軟質のものがほとんどで(3~9、11)、須恵質も少量存在する(1、2、10)。前方部前面から出土した5は、底部径13cm、底部高10cmであるが、突帯条数はわからない。須恵質はほとんどが後円部東側から出土しており、3条突帯4段以上で、焼き歪んでいるが口縁部径は20cm前半台、口縁部高は7.5~9cm、突帯間隔は9~11cmである。なお、朝顔形埴輪も少量出土している(12)。



写真3 円筒埴輪、朝顔形埴輪

家形埴輪 少なくとも2個体存在し、寄棟もしくは入母屋造である。家1(13~15)は軟質で黄褐色を呈し、分割成形とみられる屋根部(13、14)と、円形の透穴が穿たれた壁体部(15)を確認している。家2(16~40)は橙色

を呈し、砂粒を多く含む。線刻の施された柱部の破片があり(32~37)、高床式と思われる。中実の堅魚木(16)や、斜め方向に穿孔した屋根部とみられる破片(23、24)がある。両者とも、未接合の破片がほかにも多数存在する。



写真4 家形埴輪 約13:長辺約27cm、高さ約10.5cm 36:長辺約10.5cm



41



43



50

51

52

50'



58

54

56

57



写真5 矛・盾形埴輪、軒形?埴輪 素41：長辺約55.5cm、50：高さ約19.5cm、56：復元径約32.5cm、74：長辺約10cm

盾形埴輪 やや硬質で、橙色を呈する(41)。后面は上辺が山形で、深い線刻で施文している。内区は二重線により上下に分割しているが、少なくとも上半分は無文である。外区の鋸歯文については、左右では一重線のみで表現しているのに対し、上辺側では一重線で内部に縦線を入れ、内区との接点に二重線による崩れた山形を組み合わせることで表現している。同時に出土した未接合の破片(42~49)に、下辺側の外区を構成するものが含まれているものと思われる。円筒部の接合作業は進んでいないが、突帯は認められず、口縫部は切り落とし状になっている。

蓋形埴輪 立節部(50)はやや硬質で、淡黄色を呈する。節板には、部分的に赤彩が残り、一帯を2本の線刻で表現している。受部は半分に割れ、節板も接点で剥離しており、製作方法の観察に好都合である。付近から同一個体とみられる破片が出土しており、軸部(52)や細い突帯をもつものの(53)がある。笠部(54~58)は軟質で黄橙色を呈し、出土位置も離れているため、立節部とは別個体であろう。軸受部下端には突帯があり、笠部に布張表現はない。

軒形埴輪? 盾形埴輪と胎土、焼成は類似するが、外面のハケメが荒く、内面にもハケメが認められるのが特徴である(59~80)。軒形の蓋然性が高いと思われるものは、円盤部を含む節飾(60)や鐵部(61)があるが、ほかは別器種の可能性もある。石見型埴輪を想起させる複雑な削り込みをもつものの(74)や、先の盾形埴輪にはみられなかつた綾杉文を施したもの(77~80)などがある。

不明器財埴輪 周溝外側の落ち込みからまとめて出土した。色調から同一個体と考えているが、ほかの形象埴輪よりも磨耗しており、接合するものが多い(81~111)。先の盾形埴輪と同様に、二重線による網目文を施した鱗部があるが(105~109)、石見型埴輪の角状突起を想起させるようなもの(111)、片面彫刻で鈍角に開き、下端を押し込み部のように造作しているもの(110)などもあり、全形がはっきりしない。

鳥形埴輪 やや硬質で明赤褐色を呈するもの(114~121)には、基部の突帯部分をつば状に膨らませ、脚を線刻で表現したもの(114、115)や、翼もしくは尾部を線刻で表現したもの(117~120)がある。小片化しているが点数が多いことから、詳細な形状が明らかになることが期待される。翼や尾部については、軟質で黄橙色を呈する破片(122、123)もあり、別個体と考えられる。やや硬質の橙色で、ほかよりも精良な胎土の頭部は、鶏冠が接合したため鶏と判明した(112)。付近から、剥離部分と大きさが一致する耳とみられる小片(113)が出土している(112+113)。

馬形埴輪 軟質で浅黄橙色を呈する。破片数が少なく、詳細な形状はわからない。耳(124)や鎖を巻いた尻尾(127)のほか、たてがみと鞍の前輪の接点と、そこから両側に伸びる手綱を表現した破片(125)がある。126は人物埴輪の頭髪の可能性も考えたが、胎土、色調から同一個体とみなし、鞍の前でねじった手綱を表現したものと判断した。

動物埴輪 脚部が複数出土しており、やや硬質で橙色を呈し、砂粒を多く含むもの(128~134)、やや硬質で橙色を呈し、精良な胎土のもの(135、136)、軟質で黄橙色を呈するもの(137)がある。いずれも胎土、色調が先の馬形



写真6 不明器財埴輪、鳥形埴輪 ※83:長辺約16.5cm、112:高さ約16cm

埴輪とは異なるため、獸脚としておく。ただし、下端までがまっすぐ筒状となるもの(135、136)は、胎土の点からも動物以外のものである可能性も考えられる。



写真7 馬形、動物埴輪 ※125:長辺約13.5cm、130:高さ約16cm



写真8 人物埴輪、不明形象埴輪 ※144：奥行き約21cm、163：長辺約11cm、168：長辺約13cm、185：長辺約6.5cm

人物埴輪 中空の胸部が複数出土しており、少なくとも5体分は存在したと考えられる。やや硬質で橙色を呈するもの（138～140）と、やや硬質で浅黄褐色を呈し、砂粒を多く含むもの（141～145）がある。後者には、剥離痕から棒状の道具を持っていたとみられる人物（143）や、供物を載せた壺とみられるもの（146）を掛けもつ巫女（144+146）があり、どちらも指の表現が残っている。141は先述した不明器財埴輪と同様、周濠外側の落ち込みから出土した。胸部に取り付く部分で、腕の先端は残っていないが、付近から胡ろく（162は矢羽根、163は対になる三輪玉状の飾りに加え、外周に鉄を表現した矢筒）が出土している。胎土、色調が似ていることから、同一個体の武人と考えられる。このほか、玉飾りをつけた頸部（146～149）、衣装部（150～158）、剥離した鼻（159）、繊細な線刻の

ある美豆良（160、161）、人物に付属するとみられる弓（164と165は弦の表現あり、165と166は同一個体か）などがある。

不明形象埴輪 167～187をはじめ、現時点では種類を特定できていない埴輪が多数存在する。器壁が厚く、太い突帯をもち渦曲するもの（170～172）は、巫女や武人と胎土、色調が類似する。腰や脚の一部であろうか、突帯をもつ隅丸方形の筒状のもの（173、174）は、圓形や取形などの基部の可能性が考えられる。切り込みの入った角状に突起するもの（180）や、貫通しない小さな円形の窪みを施したもの（181）は、動物埴輪であろうか。また、粘土粒の貼り付けと線刻を併用して武器を表現したと思われるもの（183）や、粘土を貼り付けることで何かを表現したもの（184～187）などがある。

須恵器 墳丘流出土や周溝埋土内から出土しているが、後円部側の周溝から出土したほぼ全形のわかる提瓶（200）を除き、ほとんどが小片である。蓋坏の特徴をみると、田辺幅年TK23～47型式と思われるもの（188～191）がみられる一方、比較的残存率の高い坏蓋（192）などのように、TK10型式（TK10号窓段階）に下ると思われるものもある。しかし、蓋坏以外も含め、量的には前者に該当するものが多い。なお、土師器も多く出土しているが、ほとんどが細片である。

鉄製品 周溝埋土から、刀子状（202）および鐵状（203）の鉄製品の断片が出土している。分析を行っていないため詳細な

形状は不明だが、古墳に伴うものであれば、破壊された埋葬施設から流出した副葬品の可能性がある。

石材 前方部東側において、墳丘流出土および周溝埋土から、加工されているとみられる石材が2点出土している（204、205）。石種は未鑑定のため不明だが、埋葬施設に関わるものである可能性があり、注目される。

4. 喜志地区における5世紀の動向 [図1、写真10-11]

浮ヶ澤古墳の築造時期については、円筒埴輪の整理作業が進んでいないため、須恵器に攲るところが大きいが、5世紀末と考えられる。時期の下る須恵器については、追加埋葬に伴う可能性を想定しておきたい。落ち込みや墳丘流出土の遺物には、今のところそれ以降の時期のものは確認できず、埴輪と須恵器は一古墳に伴う資料群と考えている。特徴されるのは、周溝の検出が一部にとどまつても関わらず、豊富な種類の形象埴輪が出土したことである。未調査部分にもかなりの埴輪が残されていると考えられ、古市古墳群で当該期の豊富な形象埴輪をもつ古墳として挙げられる菅上山古墳（藤井市）や軽里4号墳（羽曳野市）と比べても、遜色のない内容といってよい。

さて、喜志地区に埋没古墳が存在することは、喜志遺跡（KS94地点）の巫女形をはじめとする埴輪群や、喜志小学校周辺に残る「高塚」という小字名により、以前から想定されてきた。ただし、その範囲は中位段丘上で、今回の調査地を含む低位段丘上はノーマークであった。小規模ながら豊富な形象埴輪をもつ浮ヶ澤古墳は、どのような背景のもと築造されたのだろうか。



写真9 墳輪以外の遺物 ※200：高さ約18cm、202：長さ約4cm、203：長さ約3cm、204：長辺約20cm



写真10 [参考] 2021-1地点の埴製不明品 ※A：径約15cm、B：長辺約4.5cm、C:Dとはほぼ同じ径か、D：径約13.5cm

喜志南遺跡の2014-1地点では、喜志南1号石室が新たに見つかった。床面には5世紀前半（埴輪検討会編年Ⅳ期1段階）の円筒埴輪が數き詰められており、副葬品は全く出土しなかつたが、埴輪は転用品で石室の構築時期を示すものではないと考えるのが自然であろう。ただし、周辺からは同じ特徴をもつ円筒埴輪や、併行する時期の初期須恵器（田辺編年TK 73型式）も出土している。

円筒埴輪は径40cmクラスの大型品であり、本市にはそれにつながる中期古墳が認められない。いつ、どこから石室に持ち込まれたのかが問題となつたが、その謎を解く手がかりが2021-1地点の調査で得られた。中世の整地土内からという出土状況であったが、類似した特徴の円筒埴輪を含む大量の埴輪が出土したのである。

同地点の埴輪については整理作業中であり、現時点での所見であることを断つたうえで紹介しておきたい。円筒埴輪は外面にB種ヨコハケを施した径40cmクラスの大型品が主体で、それよりも径の小さいものもある。1点だけだが黒斑をもつものがある一方、2014-1地点では少なかった硬質のものも一定量あり、須恵質も少量含まれている。2014-1地点のものと時期差があるのかどうか検討を要するが、埴輪検討会編年のⅣ期に収まる一群と考えられる。



写真11【参考】2014-1地点の喜志南1号石室

また、喜志南遺跡で最初の出土となった形象埴輪は、家形、蓋形などがあるが、硬質のものが多く、胎土も浮ヶ澤古墳とは異なる。加えて、連弧状の文様を刻んだ埴輪製不明品が複数個出土している。文様部分の膨らみの有無、そこからのびる筒状部分の形状などに違いがあるが、同じものを象っていると考えられる。今のところ、浮ヶ澤古墳において同形態の埴輪は確認できていない。

おそらく2021-1地点周辺には、今も相当な数の埴輪が埋もれているはずである。喜志南1号石室は単体で存在したのではなく、同様の埋葬施設が一定のまとまりをもって存在したと推測され、それらの建造は石室形態だければ浮ヶ澤古墳より下る時期と考えられる。石室調査時には、床面に使用する埴輪を古市古墳群から運んできた可能性も考えていたが、2021-1地点の調査成果により、もはや成り立たないものとなった。5世紀前半の未知の古墳、もしくは埴輪場が喜志地区に存在したとみるべきであろう。

まだ首長系譜などに踏み込んで議論できる段階ではないが、浮ヶ澤古墳が建造される前には、これまで全く知られていなかった喜志地区の人びとの動きがあったのである。いずれにしても、古市古墳群との関わりを検討することは避けられない。埋没古墳以外の資料も含めて引き続き整理作業を進め、今回得られた成果の余容把握に努めたい。

本書では、できるだけ多くの埴輪を紹介することに重きを置いた。多くの方々にその内容を知っていただき、整理作業にあたってご指導、ご教示いただければ幸いである。

＜参考文献＞

- 川西宏幸 1978「円筒埴輪統論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 日本考古学会
- 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- 富田林市教育委員会 1994「喜志遺跡(KS94)」「平成6年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書」
- 富田林市教育委員会 2021「喜志南遺跡一宅地造成に伴う発掘調査(KSS2014-1)」
- 埴輪検討会 2003「埴輪論叢」第4号・第5号
- 埴輪検討会 2022「埴輪の編年と分類」

報告書抄録

ふりがな	きしみなみいせき								
書名	喜志南遺跡								
副書名	宅地造成に伴う埋没古墳の調査概要報告 (KSS2021-2)								
シリズ名	富田林市文化財調査報告書								
シリーズ番号	76								
編著者名	角南 咲馬								
編集機関	富田林市教育委員会								
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000 (代)								
発行年月日	2022(令和4)年10月31日								
ふりがな 所収遺跡名		ふりがな 所在地		コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積(m ²)	調査原因
きしみなみいせき 喜志南遺跡		とんだばやしきしきょういちゅうめ 富田林市喜志町一丁目		27214	6	34° 23'	135° 36' 56'	2021.11.18 ~ 2022.12.22	556 宅地造成 (記録保存調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
喜志南遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代	ピット、竪穴建物、 古墳周溝	縄文土器、赤生土器、 土器器、須恵器、埴輪	埋没古墳(仮称・浮ヶ澤古墳)の前方部と周溝の一部を確認し、 市内では初となる多量かつ貴重な形象埴輪が出土した。				

印刷：明報社